

松葉屋通信

vol.29
2014.7.15

気づく目と心



小林あかね

季節が巡って光の強さが変わり
風のおい、街のおいに変化していく。

そんな変わりゆくものの中に、息をひそめて
いるような小さな小さな光はだれかの
手からうまれた美しい形のモノだった
りそれを大切に思う想いだったり。松葉
屋はそんな見落としてしまいそうな美し
いものを常に見つけられる心を持ちたい
と思っています。

『世界中のすみっこに光を当てる』

福祉施設のプロダクトの商品企画を手が
ける小林あかねさん。彼女のお仕事やそ
の想いを知りたくて、新潟の「ハチスオ
フィス」にお話を聞きに行ってきました。

誰かに知ってほしい、気づいてほしい想
いの伝え方や、想いを形にする方法を考
えらとってほしいヒントになりました。
そんなあかねさんにお話をお聞きした、
松葉屋スタッフの池田が今回はご紹介し
ます。



1978年、新潟市出身。大学卒業後金沢に拠点を移し、劇団アングエルの美術担当として作品の制作・発表に携わる。個人作品の制作に取り組む傍ら、2005年に始めた福祉施設での絵画教室を皮切りに障害児者の芸術活動全般のサポートを開始。2010年に新潟市に戻り、福祉施設でつくられた製品の企画販売を目的とした「koro/art & design in welfare」を立ち上げる。また、学童や福祉事業所、幼稚園、公園などにアートプログラムを出前・提供する「出前アートしずく号」の開設や、さらなる活動の幅を広げるべく2014年「企画製作室 Bridge」を立ち上げる。



福祉施設にお願した商品サンプルを見ながら。

福祉施設での仕事

池田（以下池） 金沢の時に働いていた施設ではどんなお仕事をされていたんですか？

小林あかねさん（以下あ） その施設の課長補佐が美大の出身の方で、障害がある方達の造形活動を昔から支援していたんです。でも、一人ではなかなかできなくて、何かやりたいとずっと思っていたところにちょうど私に来て、じゃあ美術教室やろう！って。「ハート」っていう美術教室をつくったんです。

池 その教室には入所している方全員が入るんですか？

あ とにかく場所と画材や素材だけ準備してあとは出入り自由です。なにかつくったら300円！っていうシステムにしてみました。

続けていると、だんだん作品が増えてきて、入所者のみんながつくった作品で展覧会をすることになったんですけど、「ケサランパサラン展」っていう名前をつけました。

池 実態があるのかないのか分からない。みたいな。

あ そうそう（笑）「ハート」の展覧会のシリーズの名前にぴったりだなんて。施設のカフェを会場にして、コーヒーを一杯でも飲んでいってらおうかと思って。

池 運営費は施設から？

あ 参加費と、でもそれだけじゃダメなのでポストカード売ったりだとか、原画を売ることでもかかってました。続けていき

たいからほとんど作品を売ろうって思ってた。そうこうしてたら、金沢の雑貨屋さんとかも注目してくれて一緒に企画展やりませんか？って声をかけてくださった。「しんたてクラフトバザー」っていうのが毎年金沢であるんですけど、それにも出るようになって、何年も出ていると「今年は何するのかな？」って周りが楽しみにしてくれて。感度が合う他の出展者さんとかお客さんに喜んでもらっているのが伝わってきたんです。

池 みんな期待してくれるわけですね。

あ うれしいことに、他のお店の人が商品置けないかな？とか声をかけてくれたりもしました。福祉バザーに出すと、1日3千円稼げるかどうかっていうところで3万円くらい売上があったことが、衝撃だったんです。そんなに稼いじゃった！何を売ったんだ！？っておどろいて。絵なんか売れないってみんな思っていたけど、そこで原画を買ってくれた人がいて、みんながいいよねって言うってくれることで自信になって。いまでは声をかけてもらえるようになったんですね。

池 そうやって外に出て行く事とか、気になっていただけの手を出せなかったことに誰かの手助けでいけると世界が広がりますね。

あ 最初は私がやりたくて勝手にやってただけだったんですけど、やり方を考えたら出来る方法があるんだよっていうことを知ってほしくて。

池 見せ方や伝え方を考えてくれる人っていうのは、つくる人のすっごくいいパートナーになりますよね。



金沢での劇団の活動(右)

大学で住環境デザインを学びその時に出会った劇団の裏方の仕事。「舞台っていろんな要素が交わってひとつのものが出てくるのが面白い。自分だけで完結しない部分が好き。」

あかねさんの創作活動(左)

丸い紙を繋げて、空間を立体的に表現された作品。金沢や京都のギャラリーで個展をされたりと、自信の創作活動・発表もされていた。

あ もっとこうだったらいいのにな。思っても自分でできなくてあきらめちゃったところがあったと思うんですけど、だから商品のパッケージも、今までは売っているシールとかを貼っていたのを、みんなが描いた絵をラベルにしたり。面白い絵を描く人がいるんだからそれを使わない手はないと思ってつくっていました。



金沢から新潟へ

自分にはもっと出来る事がある

あ 金沢の施設での仕事を7年間くらいやっていて商品をバザーに出したり、お店に卸したりってことをずっとやってきたけど、やっぱり結局内部で終わって、内輪で盛り上がりも誰からも商品の注文が来なかったりしたんじゃないでしょうか。外から「こんなことができないか」「あんなことができないか」って注文してくれる人がいるといいなと思って。

池 また外の人が言うのと、中の人が言うのとだと、話の通りやすさって違いますか。

あ 中にいすぎてマンネリ化して出来なくなるっていうこともありませぬ。大変で労力もいる事なので一緒にやろうという気持ちで全体にないといけないです。自分が自分で始めるきっかけになって、障害がある人たちを自分の生活力にして障害のある人たちをパートナーとして一緒に自分も稼いで生きていけるシステムの方が、組織の中でものをつくって売っているよりもお金の流れも明瞭で分かりやすいです。過度な自信があるわけではないんですけど、自分の能力をもって活かせるところがあるんじゃないかって気がしてきて。

池 もう少し、今の場所じゃないところで出来る事があるぞって？

あ 自分で稼いでみたいっていう想いもどこかあったんですよ。自分の能力をお金に換算すると・・・っていうところに挑戦したかったっていうのもありますね。

そうして、新潟へとやってきたあかねさんは同じ志をもった中嶋梨沙さんとともに、福祉プロダクトの企画・販売を行う『Kono』を立ち上げました。

あ Konoの活動では、いろんな施設にもものづくりのサポートで入っているんですけど、デザインを提供することよりも、ずっと続けていける方法を考える事の方が大事な気がして。

池 継続していくシステムですか。

あ 幸運にも私は現場を経験しているっていうのが良かったのかもしれないです。

池 同じ立場を経験しているっていうのは受け入れてもらいやすいですよ。

あ 今は必要とされている部分も少なからずあって、それが何かっていったら、小さな作業工賃だったりするんですよ。ささやかなお金でつながっている。売れた報告をして、お金を払って、っていうことをしているうちに商売として認めてもらえて、信頼関係ができたんだなって思います。長い道のりでしたけど。

新潟での拠点

『ハチスオフィス』

住所を買いいたい！

あ 最初は自宅でやっていて、事務所はどこですか？とか店はあるんですか？っていう質問にいちいち心を痛める。という・・・。

池 拠点がないじゃないかという事に。

あ 名刺に住所がないのがあやしすぎる！と思って。まずは住所を買いたかった。今シェアをしている田中くん（建築士）も自分の部屋を「設計室」って名前をつけてやって。彼もお客さんとの打合せが増えてきて、人を呼べる場所を持ちたいっていうのがあったので。

池 ここは全部ご自分たちでリノベーションされたんですよ？

あ 私はこのまま磨いてきれいにした方がいいかな？って思ったんだけど田中くんと中嶋さんは壊す派で、壊したらやらなきゃいけないからがんばったんです。最初は2階を7月から11月くらいまでかけて、そうしたら疲れ果てて1階はしばらく見ない事にして。去年の冬に1階にやっと手をつけて、もうやりたくないくらい疲れましたけど・・・これでやっと場所ができました。

池 オフィスの名前はどやってつけたんですか？

あ 名前は、隣のおじさんが田中くんにムクゲの鉢をくれて、ムクゲの別名が「ハチス」っていうから名前をハチスオフィスにしたんです。この名前が有名になれば自分たちも有名になれると思って。

あ こういう場所を持てば、オフィスだけじゃなくて写真展をやったり販売会をやったり。ここは練習空間というか実験的な空間にしたくて、だから借りる人もプロもいたりプロじゃないけど一生懸命ものづくりをしている人とかが表現する場所になった方がいいなと思って。それにここは、失敗しても良さそうな雰囲気じゃないですか？

池 失敗がない場所っていう感じですね。

ハチスオフィスの様子



あ 失敗はないけど、ある程度人に見せる
となると外用の言葉に変わったり、今まで
独りよがりだった自分だけの世界が誰かが
来るかもしれないという恐怖になったり
(笑) やっぱ、気を使うっていうのが私は
表現だと思っんです。

池 そういうひっそりと何かに取り組んで
いる人を見つけるのがあかねさんのこれか
らのお仕事なんですよ。

あ そうですね、それにあまり障害者分野
だけでなにかやろうとすると絶対に行き詰
まると思っんです。だから違う世界を組み
込んで、福祉とまたちがった世界とのやり
とりがBridgeでできるといいんじゃないか
と思っつて。

池 「福祉」という枠をつけない、分けないっ
ていう考え方なんですね。

あ その時々で相性がいいものを合わせる



赤いポストがかわいいハチスオフィス



ことができたらいいなと思っつて。たまたま
何かをしようと思っつた選択肢の中に福祉が
あった。っっていうくらいで。無理矢理じゃ
なくて良いモノは組み合わせる。まさに、
トリコラージュですね。

Bridgeの活動

すみっこに光をあてる！



あ 舞台の仕事で学んだことって、置き換
えている部分が結構あるのかもしれないで
すね。自分だけの独りよがりで作ると舞
台って絶対に失敗するんです。自分だけ
完結しないやり方を遊ぶ事ですごく面白い
ものが出来ることを学んだので。照明さん
によって物の見え方が全然ちがうこととか、
立体的に物事を見る事とか。舞台の考え方
の影響は大きいですね。

池 全体からひとつの物事を見るとか、あ
かねさんの中で一環した考え方があるなど
感じました。福祉のお仕事も、入所者の人
の考え方とスタッフの人の考え方もあるって、
全部を考えないといけないですもんね。

あ そうそう、全部ね。

池 だから、どこかやり過ぎちゃったり、
飛び出ちゃった時に俯瞰してみる事が大事
だったりとか。そこをあかねさんがコント
ロールしていたり操縦してるんですね。

あ たまに舵取り間違えてるときあります
が・・・Bridgeは船の操縦席の事で、舵取
りをする部分なんです。船はただの箱でし
かないから、一番大事なのは脳みその部分
だなって思っつてこの名前をつけました。

企画制作室 Bridge

〈Bridgeの意味〉
育った場所、近くの港に
たくさんあった働く船が
好き。荷物を積んで、目
的地に出かけて、仕事を
して、また港に戻って来
る。そんな船を操縦する
船長。

多方向から物事をとらえて、関わる人みんなの想いを

形にするお仕事をされている小林あかねさんと

8月にはトリコラージュ展、9月にはあかねさんのBridgeの活動を
紹介する展示を企画中です。

松葉屋は、あかねさんが松葉屋のすみっこを照らして下さることで、
これまで気づかなかったモノやコトに出会える事を
楽しみにしています。



2014.5.28

金継 2 回目

前回の松葉屋通信でご紹介した金継修行の2回目です。4月に漆を塗った器たちがどんな様子なのか、約1ヶ月ぶりの再開にわくわくしながら向かいました。室から器たちが登場しました。

【欠け】

準備するもの：

生漆・砥の粉・地の粉・ヘラ・竹串



1 | 地サビをつくる

- ① との粉を少量、ヘラでつぶつぶが無くなるまで固まりを押しつぶす。
- ② なめらかになった砥の粉に水を吹きかけながら耳たぶくらいの固さになるまでヘラでよく練る。
- ③ 良く練った砥の粉のとなりに1.5倍の生漆を出して、半量ずつ砥の粉と練り混ぜる。
- ④ 少しずつ地の粉を加えながら混ぜる。分量はボソボソにならずにしっかりと伸びる程度にする。



2 | サビ漆をつくる

1-②のように練った砥の粉に、同量の生漆を出して半量ずつ練り混ぜる。なるべく素早く、まんべんなく練り混ぜる。



3 | 欠けた部分に肉盛りをする

深い欠けの部分には地サビを、浅い欠けにはサビ漆を塗る。

- ① 前回漆を塗った部分を400番の紙ヤスリで軽くこする。
- ② 竹串をつかって欠けた部分に地サビ、もしくはサビ漆を少しずつ乗せるように伸ばしながら塗る。



- ・ 深い掛けの部分には一度にたくさん塗ってしまうと弱くなるので、地サビは2〜3ミリ程度にする。
- ・ 浅い欠けはサビ漆が器よりも少し盛り上がるくらいに塗る。(乾くと少しやせるので)



飯塚直人

1976年新潟県生まれ、2004年渡辺裕之氏(新潟県三条市)、2006年菅原利彦氏に漆を学ぶ。2008年に帰郷し、木工を始める。新潟県上越市在住。



← 飯塚さんが金継ぎした器

【割れ】

準備するもの：

小刀・カッター・彫刻刀、細い筆、生漆



1 | 漆を削る

はみ出た漆(カチコチに固まっている)を小刀やカッター・彫刻刀で削り取る。

器の外側は小刀やカッターで、内側は湾曲しているので彫刻刀が使いやすい。

※かなり力を入れてガリガリ削っても大丈夫。釉薬がかかっているところであればきれいにとれる。



2 | つなぎ目の処理

つなぎ目をさらに丈夫にする為に、生漆を細い筆で割れ目に沿って塗る。



3 | 欠けの肉盛り

欠けている部分がある場合は、欠けの肉盛りをする。

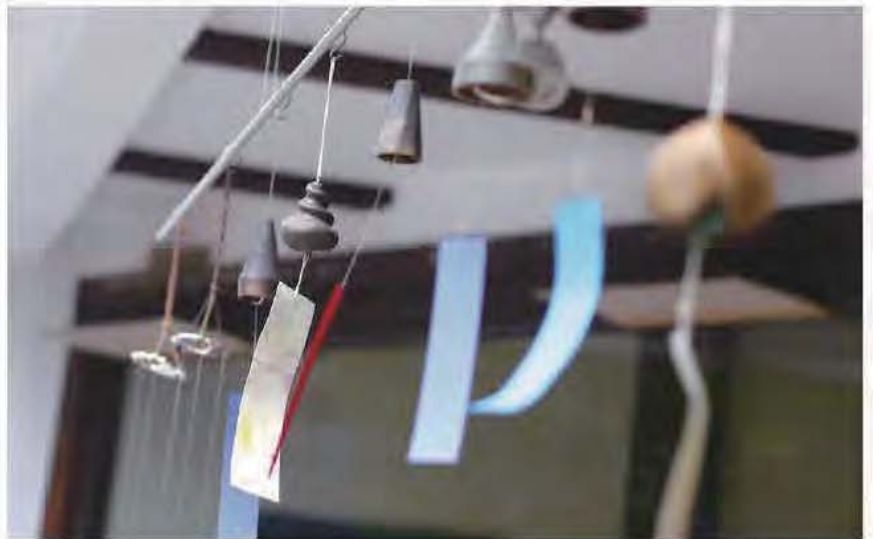


1回目に比べるとかなり進んできた気がします。次回は、早いものだよいよ金の装飾ができる！ということ。楽しみです。また次回、レポートします。

金属の音色

こんな様子でした！

5月のおわり、金属造形作家の角居康宏さんと、富山の高山市から7名の作家のみなさんの作品が松葉屋に集まりました。まだ梅雨の前の少し早すぎる暑さの中、涼しげな金属の音色が松葉屋に響きました。



錫のプレートをすきな形に切って削って、自分の名前や好きな言葉を刻印しました、暑い中汗を流しながらみなさんとっても真剣でした！



中庭や土蔵、井戸端で行った角居さんのオブジェの展示
金属ってこんなに力強くてももしろい表情を見せてくれるのかと、世界に引き込まれました。



一夜限りの『錫の酒器でワインを楽しむ会』

角居さんの錫の酒器とワイングラスとで、ワインの飲み比べの会を開催しました！松葉屋の一番大きな板一枚のテーブルが、素敵なテーブルセッティングで彩られてまるでレストランのよう。私たちも作家さんたちと一緒においしい食事とワインをいただきました。



錫の器とワイングラス、
本当に味わいが変わるのが不思議。

松葉屋通信 VOL.29

発行所：松葉屋家具店+くらし道具学研究所
〒380-0841 長野市大門町 45
TEL: 026-232-2346
FAX: 026-237-4558
since1833@matubaya-kagu.com
(水曜定休)

発行日：2014年7月15日

夏の香り

「さわやかに夏をのりきろう」精油 ヒノキ(枝葉) モミ、レモン(すべて国産精油)

すっかり夏らしい日差しや雲の形や街中のよそおいなど様々ところで「夏」を感じる季節となりました。夏は暑さでやる気も減ったり、身体も心もバランスを崩しがち。今回のブレンドの中心は飛騨高山の天然林のモミの枝葉から抽出された精油です。樹木の精油の中でも最も森林浴を表現した香りで、元気を与えてくれたり、ストレス解消への働きもあります。消臭効果も...。今年の夏も、すっきりとさわやかに、心身のバランスをとりながらみなさまが元気に過ぎますように。



たなこころ 松浦まき